

[特集I]

能登半島と横浜

— 西区「朝日湯」、菓子田卓也さんに聞く —



2024年7月
ご自由にお持ちください



[特集II]

戦後横浜写真アーカイブズ公開

戦後横浜を写した3名の写真家たち

[資料紹介]

横浜の映画青年が集めた昭和の映画プログラム

横浜都市発展記念館

ハマ発 NEWSLETTER 第40号 2024(令和6)年7月20日発行(年2回発行・不定期)
編集/横浜都市発展記念館 発行/公益財団法人横浜市長のさと歴史財団 〒223-0021 横浜市中区日本大通12 TEL. 045(663)2424 FAX. 045(663)2453
題字/ロゴ/高橋健介 本誌からの無断転載を禁じます。

EXHIBITION

特別展のご案内



銭湯経営者が寄進した石鳥居
石川県鹿島郡中能登町・久比古神社
2017(平成29)年11月撮影

横浜都市発展記念館 再開館記念パネル展

能登半島と横浜

— 銭湯がつなぐ人びとの交流 —

2024(令和6)年元日、能登半島の先端を震源とするマグニチュード7.6の地震が発生しました。横浜から能登半島は遠く離れた場所にあります。深いつながりがあります。特に横浜市内で銭湯を営み、支える人びとのルーツは多くが能登半島にありました。

本展示では、写真資料を中心に銭湯を通じた能登半島と横浜とのつながりについて紹介します。

【会期】2024(令和6)年7月20日(土)～9月29日(日)

【会場】横浜都市発展記念館 1Fギャラリー
／4F常設展示室 ミニ展示コーナー

寄贈資料の紹介

令和5年8月以降に受贈した資料です。(敬称略)

寄贈資料名	点数	寄贈者
中野春之助撮影 横浜市電気局写真アルバム	1	中野貞男
関東大震災ガラス乾板	39	中野貞男
写真プリント 「大正12年9月1日 横浜大震災」(一括)	1	中野貞男
映画関係資料(一括)	101	伊東有司
八木下恭美家資料(一括)	104	八木下恭美
浅川清永氏旧蔵資料(一括)	39	浅川姫子

※本誌は当館ホームページでもご覧いただけます。

ホームページ

<http://www.tohatsu.city.yokohama.jp/>



MUSEUM SHOP

ミュージアム・ショップより

刊行物

- 1 『関東大震災100年 関東大震災と横浜 廃墟から復興まで』
横浜都市発展記念館・横浜開港資料館/編 定価2,200円
- 2 『横浜鉄道クロニクル 発祥の地の150年』
横浜都市発展記念館/編 定価1,540円
- 3 『激震、鉄道を襲う!—関東大震災と横浜の交通網』
横浜都市発展記念館/編 定価1,320円



オンラインショップをご利用ください!

当館の各種刊行物・オリジナルグッズ等については、オンラインショップでお求めいただけます。QRコードを読み取ると、オンラインショップへジャンプします。



横浜都市発展記念館 利用案内

■開館時間

午前9時30分～午後5時(券売は閉館30分前まで)

■休館日

毎週月曜日・年末年始ほか
(月曜日が祝日の場合は開館、翌平日に休館します。)

■観覧料

特別展開催期間 観覧料は別途定めます。

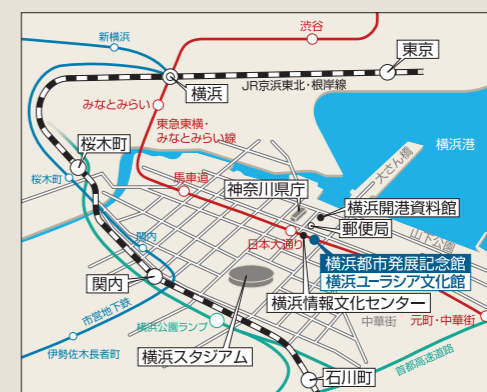
それ以外の期間 常設展のみ

一般200円/小・中学生、および市内在住65歳以上の方100円

※毎週土曜日は高校生以下無料

※「障害者手帳」「愛の手帳(療育手帳)」などをお持ちの方は、無料です。

※毎週第2水曜日「濱ともデー」は市内在住65歳以上無料



交通アクセス

- 東急東横・みなとみらい線日本大通り駅(3番出口)0分
- 横浜市営地下鉄ブルーライン関内駅(1番出口)から徒歩約10分
- J R 京浜東北・根岸線関内駅(南口)から徒歩約10分
- 横浜市営バス・神奈中バス「日本大通り駅県庁前」下車徒歩1分



●表紙図版
西区「朝日湯」のペンキ絵(見附島)
丸山清人画
2024(令和6)年5月撮影

編集後記

当館は昨年より全館空調機更新のため休館をしておりましたが、7月20日より再開館をいたします。この間、令和6年能登半島地震が発生しました。本地震で逝去された方々に謹んでお悔やみ申し上げますとともに、被災された皆さまに心からお見舞い申し上げます。能登半島は横浜と深いつながりのある地域で、震災前から地元研究者と連携して調査研究を進めてまいりました。その成果を今号の特集で公開するとともに、再開館記念パネル展で展示いたします。また、休館中に進めておりました「戦後横浜写真アーカイブズ」を公式ウェブサイトでご公開しました。今号の記事で概要を紹介しておりますので、是非ご覧いただければ幸いです。(西)



能登半島と横浜

「西区「朝日湯」、菓子田卓也さんに聞く」

菓子田卓也さんに聞く



丸山清人氏画

一、横浜市内の「能登半島」
日本海に突き出た石川県の能登半島、その中央部にあたる中能登地域（七尾市・中能登町・志賀町など）には、京浜地域の銭湯経営者が寄進した石造物が神社等に残っていた。例えば、一九二二（大正一一）年に建立された中能登町久江の久氏比古神社の石鳥居には、「東京横浜楽心会」の文字とともに、横浜や東京の銭湯経営者を含めた五四人の名前が刻まれているが、二〇二四（令和六）年元日の能登半島地震を契機に撤去されてしまった。災害によって能登と京浜地域との結びつきを示す歴史資料が失われたのである。その一方で、横浜市内でも「能登半島」と接する機会がある。例えば、一九五一（昭和二六）年創業の西区「朝日湯」の女湯の壁面には、見附島（通称「軍艦島」）のペンキ絵が銭湯絵師の丸山清人さんによって描かれている。見附島は珠洲市にある能登半島のシンボルである。度重なる地震で島は崩れてしまったが、西区「朝日湯」ではかつての威厳ある姿を見ることが出来る。

一八五九年七月一日（安政六年六月二日）の横浜開港以降、人びとに入浴の機会を提供する銭湯（公衆浴場）の運営は、能登半島、主に鹿島郡及び羽咋郡の出身者によって担われてきた。現在、横浜市内で営業する四七軒の銭湯のうち、半分以上が石川県にルーツを持つ銭湯で、西区「朝日湯」の経営者である菓子田卓也さんも能登の出身者である。菓子田さんは故郷に対する想いから見附島の絵を丸山さんに依頼したという。高度経済成長期まで銭湯を介した人の流れは自然だったが、能登の発展とともに人の流れは途絶えた。さらに銭湯経営者の出身地、定着地の双方で世代交代が進むと、その歴史を語る人間も少なくなっている。今、記録化しなければ、都市移住者の歴史は失われていくだろう。そこで今回は、菓子田さんのオーラル・ヒストリーから能登半島と横浜のつながりをひも解いていきたい。なお、菓子田さんへの聞き取り調査は二〇二四年五月二九日に西区「朝日湯」にて筆者が行った。また、本文中に登場する故人は歴史上の人物として敬称を省略した。

二、能登から横浜へ

菓子田卓也さんは第二次世界大戦中の一九四四（昭和一九）年二月、石川県羽

に「流し」、洗身サービスの技術を伝え、大橋進も父方の叔父で、田鶴浜町（現・七尾市）の出身であった。有力な経営者であった江尻福松を頂点に、非常に濃い地縁・血縁関係で銭湯の経営が行われていたのである。菓子田さんにとって伯父の島崎は「親分」、江尻は「大親分」にあたり、菓子田さんの支店配属も江尻の指示だった。菓子田さんによれば、江尻は敏腕経営者であったが、非常に温厚な人物だったという。

三、厳しい修業時代

銭湯の運営は重労働かつ過酷で、特に利益を上げるには、安価な燃料を効率的に集めなければならない。最初、丁稚はこの燃料収集から仕事を覚える。菓子田卓也さんもリヤカーを引きつつ、燃料を集めることから修業を始めたという。この仕事が非常に厳しく、燃料を満載した大きなリヤカーを簡単に動かすことはできなかった。そうしたなか、島崎石太郎のすすめで一九六一（昭和三一）年に自動三輪免許を取得、オート三輪を駆使して燃料収集を行うようになり、行動の範囲も広がった。主な燃料の供給源はかつて横浜駅周辺に存在した東洋木材（端材・大鋸屑）、古河電気工業（油ポロ・油屑・木製ドラム）、三菱ドック（古い盤木・大鋸屑）、米軍基地（廃材）、大黒ふ頭（硫酸ビッチ）などで、近所の職人からも大鋸屑や廃材を入手した。燃料不足の時代だったため、燃やせるものは何でも集めた。重要だったのは、日頃からの信頼関係で、職人からは燃料に関する様々な情報を得たという。同業者も

四、横浜に伝わる能登の文化

高度経済成長期以前、能登の雇用環境は厳しく、次男以下は横浜や東京の銭湯などへ出される傾向にあった。一〇代半ばから修業を始めた菓子田卓也さんは忍耐強さを身につけて、釜焚き等の技術も覚えていった。日々忙しくて寝ている暇もなかったが、少年時代に親元を離れたこともあり、自分で何とかしようという自覚も芽生えたという。そして一九六九（昭和四四）年、島崎石太郎が江尻系列の鶴見区「千代の湯」の経営者に移ったのを契機に、菓子田さんが経営者として西区「朝日湯」を継承する。

その後、銭湯を経営する一方で、スト

レス解消をかね、郷里にいた頃に覚えた能登の和太鼓を演奏するようになったという。和太鼓の技術は地元で先輩たちに厳しく叩きこまれ、それが現在も生きている。一九九〇（平成二）年、菓子田さんは「杉豊太鼓」を生み出し、同好会へと発展させていった。

調査日も西区「朝日湯」の脱衣所では和太鼓の練習が行われていた。「杉豊太鼓」の基礎には、郷里である石川県羽咋郡志賀町安部屋の「豊年太鼓」、同矢田の「疾風太鼓」、さらに輪島市の「御陣乗太鼓」などがあり、それを横浜風にアレンジしているという。特に「御陣乗太鼓」から発展した「杉面太鼓」は、オリジナルと同じく面をつけて演奏する。菓子田さんは五〇歳から能面師に弟子入りし、自ら太鼓で使用する面を制作していった。西区「朝日湯」の脱衣所には、そうした菓子田さんの作品や太鼓演奏の写真などが掲げられている。また、能登半島最先端の緑剛崎灯台や見附島のポスターも確認できる。それからも能登半島と横浜とのつながりが感じられる。

杉豊太鼓の演奏は横浜市内各所で行われており、能登発祥の文化に触れることができる。能登半島地震は地域史を語る歴史資料を破壊しただけでなく、地域文化の担い手である人材の流出を加速させている。可能な限り、現状の記録化を進め、能登の人びとの営みを後世に残していく必要がある。一方、横浜では、銭湯経営者を通して、能登の文化が定着、地域の中で生き続けている。

（吉田 律人）



脱衣所に掲示された見附島のポスター



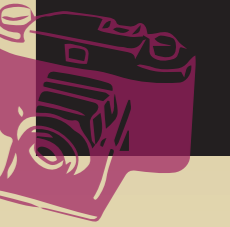
脱衣所に掲示された「杉豊太鼓」の活動



和太鼓を指導する菓子田卓也さん



西区「朝日湯」、菓子田さんご夫妻



戦後横浜写真アーカイブズ公開 戦後横浜を写した3名の写真家たち

②吉田町通りとカマボコ兵舎
1953(昭和28)年3月 五十嵐英壽撮影

来年2025年は戦後80年の節目の年である。戦後の横浜は、港湾部や都市の中心地をはじめ、多くの地域が接収を受け、多数の占領軍が駐留する基地の町となった。この時代の横浜を多く撮影した代表的な写真家が、五十嵐英壽・奥村泰宏・常盤とよ子の3名である。3名ともに占領軍兵士が闊歩する横浜の町の様子に加え、厳しい戦後を生きる市民の様子を撮影した作品の数々を生み出した。これらの写真は芸術性のみならず、歴史資料としての価値も高く評価されている。

贈を受け、整理・調査研究及び公開準備を進めてきた。その成果の第一弾として、本年4月27日より公式ウェブサイトに「戦後横浜写真アーカイブズ」において、3名の代表作である159点の写真を公開した。本稿では、本アーカイブズの特徴と3名の写真家が撮影した写真の特性について紹介する。

アーカイブズの特徴

本アーカイブズは、昭和20年代から30年代における横浜の情景を撮影した写真を中心に公開している。その特徴は、写真家ごとにページが設けられていること

にあり、後述するそれぞれの写真家の特性を表した写真が閲覧できる①。サムネイル画像をクリックすると写真を拡大して見ることができ、写真の細部も画面上で確認できるように工夫がなされている。また、各画像には「FT」からはじまる番号が付されており、申請して出版・放送など様々な用途で複製データを利用することも可能である。詳細は当館ウェブサイト内の「複製資料利用のご案内」ページを参照いただきたい。

五十嵐英壽写真の特性

五十嵐英壽は1931(昭和6)年函館市生まれ、1952(同27)年に神奈川新聞社に入社、写真部の記者として横浜港を中心に取材の日々を送る。1981(同56)年から同社編集局写真部長、1985(同60)年から同社川崎総局長を務めた。1988(同63)年に代表作となる写真集『横濱みなの唄』を刊行したほか、多くの写真集を上梓している。写真群は2014(平成26)年に当館へ寄贈されたものである。

に横浜の街と人びとをフィルムに収めてきた。そこには戦争の傷跡を残しつつ復興へと動きはじめた街の活気、豪華客船が寄港する大棧橋での出会いと別れの間模様、そして高度経済成長とともに大きく変貌する臨海部の状況など、「写真記者」としての視点で切り取られた横浜のさまざまな情景を見ることができ



①戦後横浜写真アーカイブストップ画面



<http://www.tohatsu.city.yokohama.jp/sengo-photoarchive.html>

挿図②は中区吉田町を撮影した作品であるが、米軍のカマボコ兵舎が立ち並ぶ地区と横浜市民の住宅地が道を一本隔てて並存している様子が映し出されている。占領軍との共存を余儀なくされた占領期の横浜の有り様を端的に表した一枚といえるだろう。

奥村泰宏写真の特性

奥村泰宏(1914~1995)は燃料商の奥村商会(西区)の家に生まれ、戦後直後の1949年(昭和24)より、家業に従事しつつ占領期の横浜市内の撮影を開始し、占領軍兵士であふれる街の様子に加え、「浮浪児」や「混血孤児」

「風太郎」など、社会的に弱い立場に置かれている人々に着目した写真を多数撮影した。奥村の写真群は、2018(平成30)年に栗林阿裕子氏によって当館に寄贈された。

奥村は戦後直後より、横浜市戦災者同盟(のち日本厚生団)の副理事長として社会事業活動に従事しており、横浜に多く存在した戦災者・引揚者・戦争孤児など多岐にわたる戦争被害者救済に奔走した経験をもっていた。戦前の奥村は花鳥風月など優美な題材を写真のテーマとしていたが、この経験から社会の影の部分に着目した優れた写真の数々を生み出すことになる。今回のアーカイブズでは、

常盤とよ子写真の特性

常盤とよ子(1928~2019)は、神奈川県酒問屋の家に生まれ、戦後、後に夫となる奥村泰宏と出会って写真家の道を志す。1956(昭和31)年に「働

く女性」展を開催して好評を博したほか、翌年には横浜の赤線地帯で働く女性達の姿をカメラに納めた写真エッセイ集『危険な毒花』がベストセラーとなり、戦後の女性写真家を代表する一人として注目を集めた。常盤の写真群は、2018(平成30)年に常盤の姪にあたる栗林阿裕子氏によって当館に寄贈された。

横浜大空襲で父を亡くした常盤は、戦後、父を殺した国の兵士たちに媚を売って生きているように見える赤線や青線地帯の女性たちに対して、憎悪に近い感情を持ち、理解できない存在としてあえて彼女たちを被写体として選んだという。しかし、隠し撮りで彼女たちを撮影するうちに、自分と何ら変わらない人間であることを認識し、彼女たちと親しく付き合い、ありのままの姿を撮影するスタイルへと変貌する。また、常盤は婦人更生施設の様子④を多く撮影しているが、これは売春防止法施行後の彼女たちが売春をせずに生きていくにはどのような道があるのかを世間に問う目的で撮影されたものであり、対象に深く寄り添いつつ撮影を行う報道写真家としての常盤の姿勢を強く感じることができ

以上のように、3名の写真家はそれぞれ異なる個性をもって戦後横浜の実相に迫る写真を撮影し、後世に貴重な記録を残した。本アーカイブズでは、今後も随時作品を追加していく予定である。多くの人々が作品に触れ、活用されることを期待したい。

(青木 祐介・西村 健・松本 和樹)



③聖母愛児園の食事風景
1952(昭和27)年 奥村泰宏撮影



④婦人更生施設の女性たち
1957(昭和32)年 常盤とよ子撮影

横浜の映画青年が集めた

昭和の映画プログラム

映画館が軒を並べていた横浜は、多くの邦画や洋画が封切られる「シネマ・シテイ」だった。当館では2005（平成17）年に、当館・横浜開港資料館が所蔵する映画館の映画プログラムを中心に、横浜と映画のかかわりを「シネマ・シテイ―横浜と映画―」で展示している。今回紹介する資料は、昭和戦前期から現代に至るまで横浜や東京の映画館に足繫く通った伊東秀一氏（1924〜2022）が集めた映画プログラムである。

2023（令和5）年、当館では、秀一氏のご子息の伊東有司氏から、秀一氏が生前に集めた映画プログラムや広告・チラシ・スチール写真88点など映画関係資料101点の寄贈を受けた。資料群には、秀一氏が発行した2冊の書籍（『あのころの映画 思い出のプログラム』（1983年）（以下、『思い出』）、『あのころの映画 続 思い出のプログラム』（2007年）（以下、『続思い出』））に紹介されているものを含む一方で、同書で紹介されていないものや、同書で紹介されていない資料群に入っていないものもある。資料群の詳細な研究は今後の課題だが、ここでは、とくに昭和戦前期から終戦直後の映画プログラムを中心に紹介する。

まずは秀一氏の経歴について整理する。1924（大正13）年、現在の西区伊勢町で生まれた秀一氏は、神奈川県庁職員の子の父親の都合で磯子の久木町に引っ越す。本牧中学校を経て國學院大学に入学し、1944（昭和19）年に学徒出陣で入隊するが、身体が弱かったために内地勤務となる。戦後は神奈川県庁職員として定年まで働き、2022（令和4）年9月、98歳で亡くなる。秀一氏の楽しみが映画鑑賞だった。『続思い出』に、6本観ていたという。

このような映画館通いのなかで秀一氏が集めたのが、各映画館の映画プログラムだった。資料群や『思い出』、『続思い出』からは、秀一氏が伊勢佐木町のオデオン座（横浜東亜映画劇場、横浜松竹映画劇場）や世界館、横浜電気館、横浜日活、馬車道の横浜宝塚劇場など、市内各地の映画館に足を運んでいたことがわかる。さらに資料群には、新宿の光音座、渋谷の道玄坂映画劇場、日比谷の日比谷映画劇場など、大学時代、入隊前の秀一氏が東京の映画館にも足を運んでいたことを伝えるもの、戦後の横浜宝塚劇場や横浜国際劇場で鑑賞した際のプログラムも確認できる。映画館通いのなかで蓄積された資料群は、横浜の映画史・娯楽史を伝える資料であると同時に、戦前・戦後の横浜・東京の映画館に足繫く通った横浜の映画青年の活動を伝える資料とも言える。

さて、こうした資料群のなかで1943（昭和18）年に横浜宝塚劇場で発行されたプログラムに注目したい。資料群中、横浜の映画館関係でもっとも多いのが横浜宝塚劇場のプログラムだが、なかでも多いのがこの時期のプログラムである。従前の同館のものと比較しても小さく、紙質の粗い二つ折りのプログラムには、空襲警報中の興行中止を伝える告知や、「このプログラムは必ず慰問袋に入れて戦地へお送り下さい」といった文面を確認できる。戦時中に発行されたこれらのプログラムは、戦時下を生きた人びとにとって、映画とはどのようなものだったのかを考える際の手がかりといえる。

（松本 和樹）

4-2



⑤『リアルトWeekly』No.2
1946（昭和21）年9月2日
リアルト劇場は、中区曙町にあった洋画封切館。「クリフサイドクラブ 山手舞踏場」、「あん美津、お志る古 喫茶吉住」などの広告が掲載されている。プログラムに掲載された広告も、当時の世相を知る手がかりとなる。

4-1



④-1, 2『横浜宝塚劇場』No.435 1943（昭和18）年10月7日
空襲時の注意事項が「緊急!」として表記され、これまで空襲警報中のみ興行中止としていたのを、警戒警報中も中止するとしている。見開きには、「このプログラムは必ず慰問袋に入れて戦地へお送り下さい。」という文面も見られるようになる。



⑥『横浜宝塚劇場』No.433
1943（昭和18）年9月23日
②では見られなかった空襲時の注意が、「皆様へ」というかたちで表記されている。



②『横浜宝塚劇場』第431号
1943（昭和18）年9月9日
①と比べて単色刷りになり、形も小さくなっている。



①『横浜宝塚劇場ニュース』第231号
1939（昭和14）年10月8日